

展 望

幼児の Self-Regulation : 概念分析

伊 藤 龍 子*

Self-Regulation of Pre-school Children: A Concept Analysis

Ryuko ITO*

Abstract

Concept of "Self-Regulation of Pre-school Children" is reviewed in regards to the evolutionary background. This review is performed to clarify the significance of "Self-Regulation" in the literatures. Rodgers approach (Rodgers, 1993), which is the concept analysis method of definitions, antecedents, consequences, alternative terms, and related concepts of, is referred for reviewing this concept.

The concept of "Self-Regulation", which was commonly used in the learning theory being developing in the 1970's, is clarified to be construct, and is being verified as the self-regulation theory. The concept of "Self-Regulation" is defined as to regulate spontaneously speech, action and emotion toward the desired goal in the absence of external control. The consequences of this function are to adapt oneself to circumstances in response to situational demands, to protect the dignity of human person, and to maintain and realize a sense of optimal self-existence.

In regards to developmental perspective, antecedents of "Self-Regulation" are the neurophysiological modulation, sensorimotor modulation, control, self-control, and the development of self-consciousness. The alternative term of "Self-Regulation" is autonomy, and related concepts are shown to be social behavior, prosocial behavior, gaman behavior (some kind of endurance in Japanese), morality, coping and self-efficacy.

キーワード： 幼児 (Pre-school Children), Self-Regulation, 概念分析 (Concept Analysis)
(key words)

はじめに

発達の途上にある子どもが、疾患をもち、入院をして医療上の管理を受ける場合、子どもにとって嫌いな痛みを伴う治療や処置、中には大人であつても覚悟を要する検査などが行われる。実際の臨床場面において、入院当初は抵抗していた子どもも次第に医療者による事前の説明に納得し、外的に統制されることなくがまんしながらも自ら

治療・処置を受け、終了後には満足を得ていると思われる現象を目の当たりにしてきた。その一連の行動は、就学前の幼児に認められ2~3歳ではばらつきがあるが、4~6歳では平均的に認められていた。

漸成発達説を提唱した Erikson (1977) は、基本的信頼とそれに続く自律性を獲得していく段階において、子どもにとって耐えることのできないフラストレーションは殆どないとし、彼が問題としているのは、子どもにとってはフラストレーションそのものではなく、これらフラストレーションの

* 聖路加看護大学大学院博士後期課程 (Doctoral Program, St. Luke's College of Nursing)

中に社会構造的意味が欠けていたり、失われていることである。そして、次の自発性の獲得により、子どもは突然、人格的にも身体的にも1つにまとまるように見え、躓きや不安を多少つきまわれながらも危機が解決されると記述している。また柏木(1988)は、幼児を対象にした集団生活における自己制御について述べており、その中で、自己の行動の制御機能は、行動の抑制、制止としての行動制御である自己抑制と、自分の意志や目標をもちこれを主張して実現する自己主張、自己実現の2側面があることを強調している。さらに自我の芽生え、自己主張、耐性、反抗といった現象はいずれも自己の認識や行動制御の機能に関わる事象であるとしている。

1970年代から、新生児、乳児、幼児の研究が幅広く行われるようになり、それによってこれまで新生児や乳児は未熟で無能であるという見解から有能であるという見方に大きく変化してきている。加えて日本においても、1994年に「子どもの権利条約」が批准され、医療機関においても子どもの権利についての再認識を迫られている。これまでの医療体制の見直し、大人が子どもに対する認識を新たにしたり、修正するなど幅広く変化を遂げてきているように感じられる。

このような状況を受けて、看護および医療体制の改善、子どもの権利の再認識に向けて、子どもが獲得していく機能が正しく導かれて子どもとその家族にとって納得のいく看護および医療が提供されなければならないと思われる。そして、前述した臨床場面の現象を表すものは、子どもの自己の認識や行動制御の機能であり、さらにその機能を示す概念としてSelf-Regulationが適切であると考える。これは日本において、自己制御あるいは自己調整と訳されて用いられている。しかし自己制御および自己調整という用語が用いられている研究は、主に特定の集団を対象とした実験研究の枠組みにあり、個別のあり様は分析されてはならず、またそれぞれの課題間の関係について比較検

討されていない。そこで今後の研究に向けて幼児のSelf-Regulationが発展的背景からどのように用いられてどのように定義づけられている概念なのかを明らかにするために概念分析を試みた。

方 法

用語Self-Regulationについては、看護学の領域で用いられている例は少なく、中でも小児看護学では明確にされていないことから、いくつかの学問領域において既存の文献から、どのように用いられて定義づけられているのかを確認していくことが必要である。そのため文献検索により集められたデータを統合していくために、Rodgers(1993)の概念分析の方法を参考にした。いくつか概念分析の方法がある中でこの方法は、文献検索により概念の哲学的あるいは学問的論拠からその多様な意味を考慮し、概念と看護の結びつきを探求するためにRodgersが導き出した手法である。今回は概念を明確にするための項目として、定義(definitions)、先行因子(antecedents)、帰結(consequences)、代替となる用語(alternative terms)、そして関連する概念(related concepts)についてまとめた。

文献検索は、キーワードのSelf-Regulationでは検索されず、主にSelf-Control-ChildとSelf-Control-Child-Nursingで検索した。その中から主に用語としてSelf-Regulationを用いている39件の論文や書籍を分析し、30件を引用した。また収集された文献の分析は、それぞれの論点を比較し共通点と相違点の検討をした。検索された文献の件数は以下の通りである。

- (1) CINAHLによるコンピューター検索(1982-1996)：Self-Control-Childで61件の論文が検索された。
- (2) PsycLITによるコンピューター検索(1988-1999/6)：1996-1999/6においてSelf-Control-Childで211件の論文が検索され、さらに

1988-1996においてSelf-Control-Child-Nursingで2件検索された。

- (3) MEDLINE EXPRESSによるコンピューター検索(1999/1-1999/8): Self-Control-Child-Nursingで1件の検索だった。
- (4) 書籍および雑誌(1972-1999): 書籍は、Self-Regulation、Self-Control、自己制御、行動制御などのキーワードを扱っているもの16件、上記に加えて雑誌については、Child Development、Pediatric Nursing、Journal of Nursing Measurement、Journal of Pediatric Health Care、American Psychologist、教育心理学研究、精神分析研究などを検索した。

結 果

1. 定義 (Definitions)

(1) 学習理論におけるSelf-Regulationの発展

Self-RegulationあるいはRegulationは、社会的学習理論においてBandura(1977)が主に用い始めた。彼は人間の学習は、他者の行動を観察することから得られる内的な認知要因に基づいて生ずるものが大部分を占めると考え、それをモデリングと呼び強調している。そのモデリングの過程には四つの下位過程があるとし、その第4の強化と動機づけの過程において、Self-Regulationを用いている。それは、自己反応の結果によって行動を強める効果と、低減する効果との両面を含むものであるとしている。そしてその定義は、行動の象徴的社会的強化による行動の統制から自己評価やその他の自己産出的結果によって個人が自分の行動を統制する自己制御的メカニズムであると述べられている。同様に社会的学習理論においてMischel(1973)は、満足の遅延・誘惑への抵抗を中心とし、幼児のSelf-Controlがどのように獲得されるか、どのような認知的メカニズムが作用するか、これが促進されるにはどのような方法があるかについての研究を進めていた。そして子どものSelf-Controlを

指示に従い、状況に応じて行動を起こしたり止めたりでき、社会や学校での言動の持続や目標に向けて活動を延期させ、外的な統制がなくても社会的行動を起こす能力であると定義している。続いてSkinner(1953)の理論の影響を受けたKanfer(1977)は、その学習理論において、Self-Controlを用いて大人から子どもまでを対象とし、それを自己に課された行動の標準、他者の標準との比較から個人の行為の評価、そしてそれら評価の結果であると定義づけている。

これらの1970年代における学習理論の新たなパラダイムの出現が旋風となり、その流れの中で、学習過程の要素の一つとしてSelf-RegulationおよびSelf-Controlが論じられ始めたと思われる。最近の学習理論において、Karoly(1993)は、Self-Regulationを個別にゴールへ結び付く行動を導くために得られる、環境あるいは社会との関わり合いの中で起こる内的なプロセスであると定義している。そして、ゴールの設定、自己観察、自己評価、尊大の4つの構成要素を含むモデルとして提示した。

(2) 発達心理学におけるSelf-Regulationの発展

Kopp(1982)はSelf-Regulationを総合的な概念として分析し、これまでのいくつかの学習理論や発達理論の論点を統合している。これが子どもや母子を対象にした医療や看護の研究にも大きく影響を与えている。そしてSelf-Regulationは、複雑な構成概念であると、それを要請に応ずること、緊張やしばしば社会や教育場面において言語と行動の持続を調整すること、望んだ目標やゴールに向けて行為を延期すること、外的な規制がなくても社会的に認められた行動を起こす能力であると定義している。また、理論家の論点にそれぞれ主張の違いはあるものの、Self-Regulationが社会的に認められた行動の自覚を必要とすること、子どもの社会性において重要な様相を示していることの2点については異論がないとしている。

次の2人がKoppの影響を受けている。Social Competenceについて研究しているEisenberg (1997)らは、情動と行動のRegulationは共同で個人の経験や情動の表出を調整する子どもの能力に影響を与えると強調している。そして学童を対象とし、Self-Regulationが子どもの社会化において非常に強く関係していると述べ、子どもの社会的機能は、個別に異なる制御と感情によって予測できることを明らかにしている。そしてComplianceの発達についてKochanska (1997)らは、内面化あるいは良心、内面化されたコントロール、意志、誘惑への抵抗はSelf-Regulationとして言及されると説明している。また子どもが自分の行為を制御し始めることは、有意に親子関係に影響を及ぼし、年少幼児のSelf-Regulationの出現と親のコントロール通りに努力する能力が同時に起こると報告している。さらに子どもの初期の抵抗と将来のComplianceの有意な関係が、Self-Regulationの連続性に関連することを明らかにしている。

(3) 医療における Self-Regulation

Kalory (1993)のモデルを基にし、Self-Regulationを同様に定義づけてIsrael (1994)らは、肥満の子どもとその親を対象として、作成した治療プログラムによるSelf-Regulationのトレーニングを評価するための研究を行っている。またKoppの理論を基にDeGangi (1997)らは、Self-Regulation機能障害は、乳児期における知覚運動の統合性、発達性、注意性の遅れが素因となっており、それが幼児期の情動や行動上の問題となると述べている。そして睡眠障害、栄養上の問題、高い興奮性、刺激過敏性などを呈するSelf-Regulation機能障害をもつ乳児と正常児の母子相互作用を比較した上で、機能障害の治療の重要性を明らかにしている。

看護学の領域においても、学習理論は大きく影響を与えた。中でもFleury (1996)は、Bandura、Kanfer、Karolyの理論を基にして、大人を対象にしたWellness Motivation Theoryを提唱し、その文

脈の中に下位概念としてSelf-Regulationを用いている。Self-Regulationは、ゴールに合致する行動変容のための行動やストラテジーを獲得する個人が試みるプロセスに反映する概念であると述べている。そして、刺激コントロール、再調整、行動観察といった3つの下位概念を含むSelf-Regulationの測定用具を開発している。またJohnson (1999)は、Lazarus、Bandura、CarverとScheierらの理論を基にしたSelf-Regulation Theoryを提唱している。これは患者が健康に関わるストレスフルな出来事を経験する際に用いる対処プロセスを説明する理論であると述べている。そしてこの理論は、ヘルスケア事象に対処する患者の力を高めるための介入に必要な情報のガイドラインや、いかにその情報は患者が対処することを支持しているかを表わすプロセスを提供することから臨床実践に有用であると述べている。このように1990年代以降医療においてもSelf-Regulationは用いられ始めており、構成概念としてあるいは理論として発展しつつある。

(4) ソヴィエト心理学における Self-Regulation

言語による行動制御について論じ、その中で同様の用語を用いているものがある。Vygotsky (1976)らの外言から内言へという言語の発達に目を向けたソヴィエト心理学である。それは、言語あるいは記号をもって環境にたちむかう人間の精神活動は、そのことによって、環境に変化を与えるとともに、自分自身の行動をも変化させ、それをより合理的で自由なものとするとして、言語が内面化されて自分自身の中で自己内対話が行われ、これが思考や自身の行動の制御機能において重要な手段となると主張している。また発達の条件として大人の役割を強調し、大人が子どもの文化獲得活動のプロセスをモニターし、適切な援助により、最後には子どもが1人で達成するように導くとしている。Self-Regulationが出現して発達する過程においては、母子相互関係が影響を与え

るため言葉や大人の役割は重要な意味をもつと考
えている。しかし、言語の機能は多様であり、言
語や大人による制御機能の発達とここで扱ってい
る Self-Regulation の発達との関係は明らかにされ
てはいない。そのため、彼らの見解とここで扱う
Self-Regulation とは異なることを述べておく。

2. 先行因子 (Antecedents)

(1) 発達の位相

Kopp (1982) は、Self-Regulation の antecedents に
ついて詳しく論じている。その内容は Self-Regu-
lation を獲得するまでには、不連続な発達の位相
があるとし、あえて段階 (stage) ではなく、位相
(phase) であると強調している。その理由は、その
発達には明瞭な境界線があるというよりは、漸成
的な移行を示すためとしている。さらに、Self-
Regulation の獲得までには、以下の4つの位相があ
ることを提示している。

1) 神経生理的調整 (生後2-3ヵ月)

これは、侵入的あるいは強い刺激から未熟な
身体を保護するプロセスを含み、組織化された
行動パターンの活性、活動の調節、反射運動が
ある (例; 手を口元に運ぶ、親指しゃぶりな
ど)。

2) 知覚運動調整 (3~9-12ヵ月)

子どもの自発的な運動的行為に携わる能力、
また起こる出来事への反応において行為を変更
する能力を意味する。これは、環境の中の出来
事や刺激に対する反応において広がる行動へ
の変化である (例; 手が届く、抱きつくなど)。

3) Control (9-12~18ヵ月)

状況の社会的要求を自覚し、身体的行為やコ
ミュニケーションなどを起こしたり、維持した
り、中止したりすることである。これは、コン
プライアンス、起り始めた自己監視 (観察) に
よって行なわれる。Control は、1歳の終わり頃
から2歳に及んで生ずる認知的処理能力の劇
的な質的・量的変化の派生として受けとめられて

いる。この位相から認知的要件が生じている。
それは、意志性、ゴール指向行動、行為、存在
する自己の記憶、意識的自覚である。

4) Self-Control (2歳以降)

要請による遅延; 外的な規制がない中で、社
会的な期待に応じてふるまうことであり、その
認知的要件は、具象的な思考、記憶を思い出す、
象徴的思考、同一感を維持することである。

そして、Self-Control がより適応していき、さ
らに柔軟になされるようになれば、Self-Regu-
lation (3歳以降) へと移行していくとしている。
これら4つの発達の位相が Self-Regulation の an-
tecedents である。

(2) 自己の意識の発達

上記に加えて、Self-Regulation は Self-System の
一種であり、機能として成立するためにはそも
も Self の発達、つまりは自己の意識の発達がなけ
ればならないと考える。

子どもの自己の発達について、Harter (1982) は、
乳児、就学前の幼児はまだ形式上自分自身を評価
しないものの、この段階のいずれかで自己の意識
の形成が始まり、4~7歳の間に自己の判断を言
語化し始めると報告している。さらに1990年代に
かけて Harter は、自己のプロセスがどのように発
達上現れるのか、全ての発達段階を通して自己表
現に影響を与える文脈的变化について論じてい
る。その中で Harter (1997) は、子どもは幼児期を
通して自己についての肯定的または否定的概念を
統合し始め、自己表現を調節する能力が出現する
と述べている。また梶田 (1995) が、自分なりにも
つ自己意識こそ個々人の社会性の基礎をなすもの
としており、自己意識の芽生えは、自分自身とそ
れ以外のものとの区別が少しずつできるようにな
ることでありその時期は乳児期であるとしてい
る。そもそも自分が「自分らしさ」を意識するこ
とであり、乳児期に芽生え、幼児期にはそれを表
現するように発達していくものであることが理解

できる。

3. 帰結 (consequences)

Self-Regulationのconsequencesは、外的な規制がなく、自発的にregulateすることによって、状況に応じて環境に適応していくこと、自ら選んだ目標に到達できるように向かっていくこと、自己の尊厳を守ること、至適な自己の存在感が保たれ、よりよく実現されることであり、社会的な価値や規範を自覚して行動できることの5つが挙げられる。

これらはそれぞれの理論家の定義や強調点、中心的テーマが示されたことで明らかにされたことである。つまりSelf-Regulationはグローバルな概念であり、複数の下位概念を含むものである。その種類としては、Self-Regulation提示の源となる社会的学習理論において、Mischel (1973)は、満足の遅延と誘惑への抵抗に焦点を当てており、Bandura (1977)は、認知的要因に基づくモデリングを、Kanfer (1977)は、自己強化および自己評価を中心にしている。さらに発展させてKaroly (1993)は、Self-Regulationをゴールの設定、自己観察(監視)、自己評価、尊大の4つの下位概念から統合している。新名(1998)は自己制御(Self-Control)を逸脱への抵抗、満足の遅延、自己報酬的行動、自己罰的行動からなると報告している。その中で、自己制御(Self-Control)がそもそも直接強化(報酬や罰)によって形成されるものであり、次第に直接強化に依存せずに自分の内的基準によって評価し、制御するようになることを報告している。用語はSelf-Controlを用いているが、その定義はSelf-Regulationと同様である。

発達心理学においては、Kopp (1982)がこれまでの各理論家の論点を統合させ、子どもの発達の観点から論じ、発達の観点における、Self-Regulationのantecedentsを報告した。また各理論家のコンセンサスとして、Self-Regulationが社会的に認められた行動の自覚を要することと子どもの社会

性の様相を示すこととしている。またEisenberg (1997)は、RegulationとEmotionalityからSocial Competenceを中心に論じている。Kochanska (1997)は、幼児初期のcomplianceとinternalizationに焦点を当てている。

看護においては、Fleury (1998)が、Self-Regulationの測定用具の開発において、概念分析を行い、刺激コントロール、再調整、行動観察(監視)の3つの下位概念を含む構成概念であるとしている。このSelf-Regulationは、Wellness Motivation Theoryのプロセスにおける1つの側面である。

これらからSelf-Regulationには、認知、情動、行動、行動の抑制機能、自己主張、自己評価、自己強化、自己観察、自己報酬的行動、尊大、社会的行動、注意・関心、自己意識、身体機能の獲得などの要素を含んでいることが理解できる。

4. 代替となる用語 (Alternative term)

自律性 (Autonomy)

子どもの発達の観点において、柏木(1988)によれば、外的な刺激や強化が次第に後退し、自分自身の反応の様式やルールについての基準をもち、これに即して反応を選択し維持する機能は、強化の自律化であり、内在化の機能であると述べ、その点において、道徳的発達の立場からみた自律的行動に相当するとしている。外的な規制を他律とすれば、自己制御は自律と考えることができる。つまりこの観点においてSelf-Regulationは、他律から自律への移行とみなされる。そして、社会の価値や規範に応じて、個人の価値や規範、目標が生ずるため、それにより自分の行動を自律的に統制することになることから、自律性(Autonomy)はSelf-Regulationの代替となる用語と考えられる。

5. 関連する概念 (Related Concept)

(1) 社会的行動 (Social Behavior)

学童の社会的行動の予測に関する研究において、Eisenberg (1997)は、幼児のRegulationとEmo-

tionalityの個人差によって、学童期の社会的行動としての、学校での有能な行動と家庭での問題行動を予測できることを明らかにしている。これは Regulation、Emotionalityによって社会的行動が決定されうることを示しており、重要な関連があると考えられる。また古畑(1998)は、幼児の依存性、攻撃的行動などの社会的行動と養育態度やしつけなどとの関係を調べてきた経緯から、社会的発達の著書において、子どもの自己制御の発達(新名, 1998)を含めている。社会的行動は、社会における対人関係の中で示される行動であり、有能な行動から問題行動までが含まれるのである。そして Self-Regulation と社会的行動との関連性から、Self-Regulation が環境あるいは社会の影響を強く受けるものであり、子どもが置かれた環境あるいは社会によっては、受けるストレスにより不均衡が生じることもあり、中には病的な退行や行動異常などの方向も考えられる。

(2) 向社会的行動(Prosocial Behavior)

社会的行動とは概念を別にして、向社会的行動について1980年代以降論じられてきている。向社会的行動と自己主張的側面との関連を検討した研究において、この両者が密接に関連していることが示されている(Eisenberg 著, 二宮・首藤・宗方訳, 1995)。その著書において、向社会的行動はしばしば、援助行動や、分与行動、他人を慰める行動といった他者に利益となるようなことを意図してなされる自発的な行動として定義されている。多くの向社会的行動は、具体的な報酬の期待、社会的承認、あるいは自分自身のマイナスの内的状態(たとえば、助けを必要としている他者を見ることによって生じる罪障感や心痛)を少なくしたいという願望などの要因によって動機づけられている。向社会的行動には愛他行動も含まれ、それは、他者への同情とか内面化された道徳の原則に従おうとする願望によって動機づけられていると説明している。さらにその芽生えは、生後1年目

頃であるとしている。同様に首藤(1995)は、思いやりなどの幼児の向社会的行動と自己主張・自己抑制の関連についての研究において、自分の意思や欲求を行動として表現する自己主張の側面が、自然場面での向社会的行動と有意に関連すること、自己抑制は幼児の向社会的行動とほとんど関係していないことを明らかにした。そして、Self-Regulation との関連において、幼児の向社会的行動にはすでに自己制御機能の個人差が関係しており、幼児が自然に見せる向社会的行動には、自己の考えを持ち自己の要求や意見を積極的に他者に表現しようとする自己主張の側面が深く関係すると述べている。また伊藤(1999)らは、幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連について検討し、結果として自己主張も自己抑制もすると認知している幼児は、自発的向社会的行動をする傾向が高く、自己主張・自己抑制認知の両面が自発的向社会的行動と関連があることを明らかにした。いずれにおいても向社会的行動と Self-Regulation とに強く関連性があることを示している。

(3) がまん(Gaman Behavior)

日本において、特に親の養育態度やしつけにおいて象徴的な概念である。がまんは、Self-Regulationにある自己抑制機能の側面と考えられる。片田(1982)は、個人の潔白や社会的調和を維持するための努力であると記述し、1つには情緒的反応のコントロールであることと、もう1つには Compliance あるいは満足の遅延として示される身体的行動のコントロールがあるとして2つの側面について述べている。彼女は、日本に特有の対処(Coping)の仕方であることに注目している。また柏木(1988)は、日米における子どもの特性の比較から、自己主張的である米国に対して、日本は自己抑制的行動制御が強いことを指摘している。その端的な例として、日本において価値があり、望ましい特性とされている「我慢」、「我慢強さ」を挙げている。そして「我慢」は、自分に脅

威を感じさせるようなストレスのある状況で起こる認知的・行動的反応であり、また自己とストレスを含む環境との調和をつくり、両者を統合するような仕方に対処する点で独特な反応であると論じている。がまんの特徴は、ストレスを変えようとするのではなく、あえて受け入れることであり、消極的で抑制的な対処方法であると考えられる。そのため、この日本における「がまん」は Self-Regulation の 1 側面であると考えられる。

(4) 道徳性 (Morality)

Self-Regulation 機能と同様に道徳性も生後、環境/社会の影響を受けつつ獲得されていく特性である。高橋(1998)は、道徳性の発達について、個人的欲求と社会的義務との避けられない葛藤を、個人がどのように処理していくのか、その処理のしかたの発達であるとしている。そして、子どもにとっては社会の道徳的規範が外的なものから、時に個人の欲望と葛藤するけれども、やがてはその規範が、個人の内的なものとなり、この外的な統制が自己統制に置き替わっていくことを道徳的内面化という述べている。さらに道徳性の発達は、個人的欲求と社会的義務が葛藤する中で、道徳的内面化が進んでいくことであると説明している。このことから、Self-Regulation の獲得が道徳的内面化を表し、それによって次第に道徳性が発達していくこととなり、Self-Regulation が道徳性の発達の基盤となると考えられる。

(5) 対処 (Coping)

Lazarus (1988)によると、Coping は、結果(成功と失敗)に関係なく、ストレスフルな圧力(要求)を処理する認知的、行動的努力であると定義している。小児看護学では、小児の Coping について Ellerton (1994)らが、採血場面における幼児の対処行動への影響因子について調べ、幼児が使用する対処行動を明らかにしている。結果は、幼児は主に自己防衛行動を用いており、幼児の個人的変数

(性差、鋭敏さ、気質、保健信念行動、病気や採血の経験)と対処には関係がないとし、ストレスフルな体験の反応を緩和することに、医療者の影響力があるとしている。子どもは痛みを伴うことに対しては、防衛的になると解釈でき、その理由としてストレスフルな圧力(要求)を処理するリソースを持ち得ていないことが挙げられる。そして、幼児期の子どもには Coping 機能が芽生えていると思われるが、主に用いる防衛的行動は、Coping 理論において含まれている立場もあればそうではない立場もある。いずれにしても Coping は Self-Regulation の一部であり、包含される概念と考えられる。

(6) 自己効力 (Self-Efficacy)

Bandura (1995)は、社会的学習理論を発展させてきた経過の中で自己効力の重要性を主張している。その自己効力に関する信念において、強力な効力感を作り出す最も効果的な方法は、制御体験を通じたものであり、その体験は、成功するために必要なことは何でもできるという確証を与えることになる。そして制御体験を通して効力感を発達させることは、絶えず変化する生活環境を規制する適切な行動を作り出し実現するための、認知的、行動的、自己制御的な手段を獲得することなのであると述べている。自己制御的な手段の獲得により、成功の体験を通して自己効力感がの信念が作りあげられて発達していくと考えられる。自己効力の表れやその発達は、Self-Regulation に基づく体験が不可欠であり、Self-Regulation が先行因子であると解釈できる。両者は非常に密接な関連があり、切り離すことはできず、常に連動される概念と考えられる。この意味において人間の生活において、Self-Regulation は中心的な課題とも言える。

考 察

これまでの各論点を統合させつつ、幼児が医療を受けるというストレスを伴う出来事や状況を考慮して、幼児のSelf-Regulationは次のように定義された。

幼児期の子どものSelf-Regulationとは、外部からの規制がなくても自発的に自ら選んだ目標に向けて自己の言動、情動をregulateすることである。その中には、ストレスを伴う出来事や状況において自己を防御すること、自己の言動の抑制機能としての自制すること、一方で自己の欲求や意思、情動を表して自己を主張するという機能が含まれる。この機能は、状況に応じて個人が置かれた環境に適応し、自己の尊厳を守り、そして至適な自己の存在感が保たれよりよく実現するためにある。この定義は、特に医療場面において子どもの自己の意思に反する出来事や状況が避けられずストレスを伴うことが多いため、多くのSelf-Regulation研究者の定義に自己の尊厳を守ることを加えている。そして自己の言動を抑えることのみならず、自己を守りつつ、自ら満足や喜びを得て、生き生きと活動していくことができるために自己をありのままに表現する自己主張の側面を強調していること、さらに子どもの個別のあり様を支え、表現するものとして情動にも焦点を当てていることに特徴がある。

Self-Regulationは、主に1970年代以降、学習理論の発展に伴って用いられ始めた。1980年代には、総合的でグローバルな概念として分析され、次第に理論の1側面として、複数の下位概念あるいは概念ユニットを持ち、操作と測定が可能な構成概念であること、一方Self-Regulation理論として検証され始めていることが提示された。だがこの概念自体、学習理論を基盤としており、測定の対象の多くは学童や学童期以降の青少年、大人であり、就学前の乳幼児が対象となっている報告はまだ少ない。そのような中で、発達の観点から

Self-Regulationの先行因子(antecedents)、つまり発達の位相が明白に提示されたことは、今後の幼児を対象とする研究に発展性を与えるものと思われる。

またSelf-ControlとSelf-Regulationは、いまだに同様の意味合いで用いられることも多く、混同しやすい。しかしBandura(1977)はあえてRegulateを用いており、柏木(1988)もSelf-Regulation(自己制御)を用いている。その理由についての記述は見当たらないが、用語の意味からControlが外的な規制や統制を含むものであり、強制や抑制、制止などの意味をもち、それに対しRegulateは内的で自発的な意味あいをもつためであると推測される。そして発達の観点からSelf-ControlはSelf-Regulationの先行因子(antecedents)と考えることが妥当と思われる。これらの概念を用いる研究者には、それぞれの主張があると思われるが、両者の相違を明確にし、それぞれのコンセンサスの上で議論することが必要であると思われる。

提示したSelf-Regulationの定義において、重要な要素として、自ら制御(統制)する言動や情動は外的な規制がなく自発的であり、自己の目標に向けるためであること、環境に適応するためであること、至適な自己の存在感を維持、実現するためであること、自己の尊厳を守るためであることといった5つがある。その具体的な機能として、自己の言動の抑制機能としての自制と、自分の欲求や意思、情動を表す自己主張の主な2つの側面があり、さらにストレスの伴う出来事や状況において自己を防御する機能がある。このSelf-Regulationは、認知、行動、情動が関わりあって獲得されていく特性である。その獲得の時期とされている幼児期について、Erikson(1977)は、幼児初期の子どもは、自由に選択をする自律を正しく導かれて経験し、この段階は自己表現の自由とその抑制の割合にとって決定的な意味をもち、自尊心を失わずに獲得した自制の観念から、善意と自負の永続的感覚が生まれ、自制心の喪失や外部から

の過度の統制から疑惑や恥を抱く永続的性癖が生じると記述している。さらに幼児後期に獲得する自発性については、驚異に値する力強い新しい展開と強調し、子どもは「より彼らしく」なり、より愛情深くなり、その判断力にもゆとりと輝きがみられ、反応も活発化され、他者への働きかけも活発となり、彼に失敗をすぐに忘れさせ、望ましいと思われるものへ向かってひるむことなく、よりの確に接近することを可能にすると述べている。幼児初期の自律性を獲得する時期が、Self-Regulation を獲得し始める発達の位相と重なり、おおよそ2~4歳頃であり、その時期に自由に選択していくことを通して、自律性が獲得され始めて、次第に外部からの統制を受けずに自発的な自己の統制へと移行していくものと思われる。そして幼児後期の自発性を獲得する時期は、おおよそ4~6歳頃であり、自分の意思を持ち、目標に向かって望ましい方向への確に進んでいけるようになり、Self-Regulation はすでに獲得されて遺憾なく発揮される時期と考えられる。このように Self-Regulation はおおよそ3歳頃には芽生え、6歳頃には十分に余裕を持って機能していると思われる。それ以前は、Self-Regulation の発達の位相の時期であり、Self-Control までを示すことになる。

これらのことから、幼児期の子どもは、すでに自分の意思や欲求、目標を持ち、外的な統制から自律的に統制して自発的に活動できるようになり、Self-Regulation を獲得し始めて、十分に発揮できるまでになるのである。そしてこの Self-Regulation は、子どもがその子どもらしく、人間として至適な自分の存在感を維持、実現させることができるようにし、ストレスを伴う出来事や状況においては自己の尊厳を守りながらその状況を乗り越えようと努力する特性であることから、人間が人間らしく成長するための基盤となる重要な機能であると考えられる。子どもの Self-Regulation の機能を認識し、その意思や欲求、目標を尊重することがケア提供者や親、大人に求められること

である。それが「子どもの権利」を尊重することにも結び付き、倫理的な対応となると考えられる。

一方、小児看護学の領域においては、この Self-Regulation は、ほとんど用いられていない。この概念を扱っているのは、主に心理学、教育学の領域である。Kopp (1982) は、ストレスを伴う出来事や状況においては、子ども自身の統制するレベルが通常に比べて変化することを指摘している。そのため、今後は子どもの Advocacy の観点から、子どもにとってストレスを伴う出来事や状況が避けられない医療の場において、子ども自身の統制が通常に比べて変化することにも目を向け、医療従事者が Self-Regulation を認識して、それが正しく導かれていくように子どもの自律性、自発性に応じてケアしていくことが重要と思われる。さらに今後の研究において、幼児の Self-Regulation を踏まえた情報の提供や情動を支持する看護介入を特定し、介入の効果を実証していくことが課題である。

結 論

幼児の Self-Regulation について概念分析を試みた結果、その発達の経過から医療にも構成概念として浸透しつつあることが明らかになったとともに、重要なこととしてその先行因子 (antecedents) が明示された。それは発達の位相であり、1) 神経生理的調整、2) 知覚運動調整、3) Control、4) Self-Control の4つが漸成的に含まれている。さらに筆者が antecedents として自己の意識の発達を提示した。そして先行因子 (antecedents) の提示と Bandura (1977)、柏木 (1988) の指摘から、Self-Control と Self-Regulation の違いが明白になった。

さらに筆者が定義づけた Self-Regulation において、重要な要素が5つ挙げられた。自ら制御(統制)する言動や情動は、外的な規制がなく自発的であることであり、環境に適応するようにするこ

と、自らの目標に向けること、至適な自己の存在感の維持、実現していくためであること、そして自己の尊厳を守るためであることである。その具体的な機能として、自己の抑制機能としての自制、自分の意思や欲求、情動を表す自己主張の主に2つあり、さらにストレスを伴う出来事や状況から自己を防御する機能がある。これは、人間が人間らしく成長していく基盤となる重要な特性であると考えられる。

今後小児看護学において、幼児のSelf-Regulationに基づき、子どものAdvocacyの観点から、Self-Regulationが医療従事者に認識され、それが正しく導かれていくように子どもの自律性と自発性に応じたケアの実践とその研究が望まれる。

引用文献

- DeGangi, G.A., Sickel, R.Z., Kaplan, E.P., Wiener, A.S. 1997 Mother-Infant Interactions in Infants with Disorders of Self-Regulation. *Physical & Occupational Therapy in Pediatrics*, 17 (1): 17-44.
- Eisenberg, N, Fabes, R.A., et al. 1997 Contemporaneous and Longitudinal Prediction of Children's Social Functioning from Regulation and Emotionality. *Child Development*, 68 (4): 642-664.
- Ellerton, M.L., Ritchie, J.A., Caty, S. 1989 Nurse's Perceptions of Coping Behaviors in Hospitalized Preschool Children. *Journal of Pediatric Nursing*, 4 (3): 197-205.
- Fleury, J. 1996 Wellness Motivation Theory: An Exploration of Theoretical Relevance. *Nursing Research*, 45 (5): 277-283.
- Fleury, J. 1998 The Index of Self-Regulation: Development and Psychometric Analysis. *Journal of Nursing Measurement*, 6 (1): 3-17.
- 古畑和孝編 1998 社会的行動の発達. 学芸図書株式会社. 212-241.
- Harter, S. 1982 Developmental perspective on the Self System. In Hetherington, M. (Ed.), *Social development*, 275-385, *Carmichael's manual of child psychology*. John Wiley.
- Harter, S. 1997 The Development of Self-Representations. In Damon, W. (Ed.), *Social, Emotional, and Personality Development*, 553-617, *Handbook of Child Psychology*. John Wiley.
- 林峻一郎監訳 1990 ストレスとコーピング, ラザルス理論への招待. 星和書店 (A Lecture by Lazarus, R.S. 1989 *Meaning Stress to Predict Health Outcome*)
- 原野広太郎・福島脩美訳 1977 人間行動の自己制御. 新しい社会的学習理論. 128-148. 金子書房 (Bandura, A. 1971 *Social Learning Theory*. General Learning Press)
- Israel, A.C., Guile, C.A., Baker, J.E., Silverman, W.K. 1994 An Evaluation of Enhanced Self-Regulation Training in the Treatment of Childhood Obesity. *Journal of Pediatric Psychology*, 19 (6): 737-749.
- 伊藤順子・丸山(山本)愛子・山崎晃 1999 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連. *教育心理学研究*, 47: 160-169.
- Johnson, J.E. 1999 Self-Regulation Theory and Coping with Physical Illness. *Research in Nursing Health*. 22: 435-448.
- 梶田叙一編 1995 自己意識の発達心理学. 金子書房. 1-32.
- Kalory, P. 1993 Mechanisms of self-regulation: A system view. *Annual Review of Psychology*, 44: 23-52.
- Kanfer, F.H. 1977 The many face of self-control, or behavior modification changes its focus. In R. B. Stuart (Eds.). *Behavioral self-management: Strategies, techniques, and outcome*. New York: Brunner/Mazel.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に—. 東京大学出版会. 1-43, 156-178.
- Kochanska, G., Murray, K., Coy, K.C. 1997 Inhibitory Control as a Contributor to Conscience in Childhood: From Toddler to Early School Age. *Child Development*, 68 (2): 263-277.
- Kochanska, G., Tjebkes, T.L., Forman, D.R. 1998 Children's Emerging Regulation of Conduct: Restraint, Compliance, and Internalization from Infancy to the Second Year. *Child Development*, 69 (5): 1378-1389.
- Kopp, C.B. 1982 Antecedents of Self-Regulation: A Developmental Perspective. *Developmental Psychology*, 18 (2): 199-214.
- Mischel, W. 1973 Toward a cognitive social learning reconceptualization of personality. *Psychological Review*, 80: 252-283.
- 本明寛・野口京子監訳 1997 激動社会の中の自己効力. 金子書房 (Bandura, A. 1995 *Self-Efficacy in Changing Societies*. Cambridge University Press)
- 二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子訳 1995 思いやりのある子どもたち. 向社会的行動の発達心理. 北大路書房 (Eisenberg, N. 1992 *The Caring Child*. Harvard University Press)
- 仁科弥生訳 1998 幼児期と社会1. みすず書房. 317-332. (Erikson, E.H. 1963 *Childhood and Society*. W.W. Norton & Company, Inc.)
- Noriko, K. 1982 Gaman Behavior of Preschoolers During Hospitalization, Japanese Coping Strategy. 第1回日本看護科学会誌, 169-170.
- 新名理恵 1998 社会的行動の発達. 古畑和孝編 子どもの自己制御の発達. 学芸図書株式会社. 91-111.

幼児の Self-Regulation: 概念分析

- 首藤敏元 1995 幼児の向社会的行動と自己主張・自己抑制. 発達心理学研究, 7: 77-86.
- Rodgers, B.L., Knafl, K.A. 1993 Concept Development in Nursing. *Foundations, Techniques, and Applications*. W.B. Saunders Company.
- 高橋丈司 1998 社会的行動の発達. 古畑和孝編 道德性の発達. 学芸図書株式会社. 166-189.
- Vygotsky 著, 柴田義松訳 1989 思考と言語 上. 明治図書
- Vygotsky 著, 柴田義松訳 1989 思考と言語 下. 明治図書

参考文献

- Bandura, A. 1978 The Self System in Reciprocal Determinism. *American Psychologist*, 33: 344-358.
- Bandura, A. 1989 Regulation of Cognitive Processes through Perceived Self-Efficacy. *Developmental Psychology*, 25 (5): 729-735.
- Barth, R.P. 1993 Promoting Self-Protection and Self-Control Through Life Skill Training. *Children and Youth Services Review*, 15: 281-293.
- Carver, C.S., Scheier, M.F. 1981 Attention and Self-Regulation: A Control-Theory Approach to Human Behavior. *Springer Series in Social Psychology*. Springer-Verlag, New York.
- Feldman, R., Greenbaum, C.W., Yirmiya, N. 1999 Mother-Infant Affect Synchrony as an Antecedents of the Emergence of Self-Control. *Developmental Psychology*, 35 (5): 223-231.
- Kopp, C.B. 1989 Regulation Distress and Negative Emotions: A Developmental View. *Developmental Psychology*, 25 (3): 343-354.
- 中澤潤・大野木裕明・伊藤秀子・坂野雄二・鎌原雅彦 1988 社会的学習理論から社会的認知理論へ—Bandura理論の新展開をめぐる最近の動向—. 心理学評論, 31 (2): 229-251.
- 斉藤久美子 1993 セルフ・レギュレーションの発達と母子関係. 精神分析研究, 36 (5): 478-484.
- 山崎晃・白石敏行 1993 幼児の自己実現を自己主張と自己抑制からとらえる. 保育学研究, 31: 104-112.